

「大田美和の本」



実にそのものズバリのタイトルだ。大田美和、51歳、歌人。英文学研究者、中央大文学部教授であり、2児の母でもある。本書にはこれまでに出版した4冊の歌集、あちこちで発表した詩編とエッセーに、書き下ろしの自筆年譜を収めた。なるほど、まるごと著者の人生が詰まっている。年譜によれば、生後間もなく東京から茅ヶ崎市へ、さらに寒川町に移り県立湘南高校へ。東京で大学生活を送り、「未来」短歌会で近藤芳美に師事。伴侶との出会い、闘病もあり、波乱に満ちた

著者の人生、まるごと提示

とまではいかないが、それなりに起伏がある。ページの3分の2を占める短歌作品だけでも読み応えがあり、その背景をエッセーや年譜でたどれる。短歌の中の〈私〉が作者とそのまま同一人物という保証は実はどこにもないのだが、おそらくかなりの確度で等身大そのままを詠んでいるのだろうと感じさせる。例えば、28歳で出した第1歌集「きらい」の「フェミニズム論」面接室を出て教授は男ばかりと気づく、33歳の第2歌集では「離婚届を出しちまおうか大学での旧姓使用を否」と言われる」など。フェミニズム一辺倒ではないのだが、折々の思いを通して読むことで、現代日本で生き方を模索する女性の姿が見えてくる。(幸)

大田 美和 著

(北冬舎 ☎03・3292・0350、2376円)